

1964年東京五輪を実現させた フレッド・ワダ・イサムとは？



①目の前に広がる広大な海。人々は成功を夢見て海を渡った。②勇さんの父母が生まれた地域は北米への移民も多く、妻・正子さんの故郷、美浜町にはアメリカ村と呼ばれる地区もある。③④勇さんに所縁のある展示物を見ることができる御坊寺内町会館。1984年のロサンゼルスオリンピックでも組織委員会の委員の一人として活躍し、青いブレザーはその時のもの。住所／御坊市御坊206



⑤御坊寺内町会館にパネル展示されている寄付をしたことを伝える資料。⑥優しい笑顔が印象的な勇さん。バイタリティと熱意に溢れ、細かいところまで気遣いのできる人物だった。⑦その活躍は小学校の道徳教科書にも掲載されている。(発行／教育出版株式会社)



今から遡ること54年、アジアで初めてのオリンピックが東京で開催された。その意義は日本にとって計り知れないほど大きく、スポーツの普及はもちろん、都市の開発や道路など社会的なインフラの整備も飛躍的に進めた。戦後の復興を全世界に印象付けたオリンピックの東京開催に尽力したのが、和歌山をルーツに持つ日系2世の「フレッド・和田・勇」である。

和歌山の中部から南部の沿岸部は山々と海が近いため耕地が狭く半農半漁の寒村が多かった。しかしそこに住む人々は進取の気性に富み、明治期には仕事を求め多くの若者が北米に渡ったという。勇の父、善兵衛もそうした移民のひとりだったが、その暮らしは楽ではなく、勇は口減らしのために4歳から5年間、和歌山で暮らす祖父母に預けられた。そこで勇は、老若男女がそれぞれの役割を分担し、獲れた魚は平等に分かち合う地曳ぎ網漁を目にする。そのお互いに助け合い、喜びもまた分かち合う人々の姿は勇の心に焼き付き、

“超我の奉仕”という精神は、その後の勇を突き動かす原動力となる。再び渡米し、ようやく20歳で独立し青果店を開店。26歳で結婚(正子・美浜町出身)するが、第二次世界大戦中には事業の継続も困難になり、集団移住を強いられた。戦後は持ち前の経営力で10店舗を構える実業家になるが、助け合いの心は忘れていなかった。全米水泳選手権に出場する日本人選手を自宅に招き、物心共に支え、日本のスポーツ界と深い絆を持つこととなる。そして1959年の国際オリンピック委員会(IOC)総会に向けた集票活動として、私費を投

じて中南米を歴訪し、各国のIOC委員に東京への招致協力を依頼。1回目の投票で東京が過半数を獲得し、東京での開催が決定したという。「勇さんたちは和歌山で暮らした日々が楽しかったのでしょうか。度々帰郷し、それぞれが通った小学校に対してお金や文房具などを寄付したそうです」と語るのは和歌山勇顕彰会の岡本恒男事務局長。一個人である勇の「祖国、日本のために」と燃やした情熱は、オリンピックだけでなく今日の日本の礎となり、今も和歌山の誇りとして語り継がれている。

(本文中敬称略)

1964年東京オリンピック開催のための集票活動については、本誌35号(知事対談P12~15)に詳しく書かれています。